2018 年 5 月 27 日（日）「霊的戦いへの備え」

マタイ 17:14-21

14 彼らが群衆のところに来たとき、ひとりの人がイエスのそば近くに来て、御前にひざまず
いて言った。 15「主よ。私の息子をあわれんでください。てんかんで、たいへん苦しんでおり
ます。何度も何度も火の中に落ちたり、水の中に落ちたりいたします。 16 そこで、その子を
お弟子たちのところに連れて来たのですが、直すことができませんでした。」
17 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたと
いっしょにいなければならないのでしょう。いつまであなたがたにがまんしていなければならな
いのでしょう。その子をわたしのところに連れて来なさい。」 18 そして、イエスがその子をおし
かりになると、悪霊は彼から出て行き、その子はその時から直った。
19 そのとき、弟子たちはそっとイエスのもとに来て、言った。「なぜ、私たちには悪霊を追い
出せなかったのですか。」 20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まこ
とに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、『ここからあそ
こに移れ』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。 21
〔ただし、この種のものは、祈りと断食によらなければ出て行きません。〕」

【序論】

私たちの人生において、病の問題は誰も避けて通ることができません。身近な「風邪」も一時的な病であり、罹ると数日悩まされるものです。私たち一家も今年に入ってインフルエンザに罹り、苦しい思いをしました。とはいえ、通常はおよそ一週間で治るという希望がありますから、大抵のことは耐え忍ぶことができます。しかし、不治の病というのは、一度罹ると一生付き合っていかなくてはならない類のもので、人はその病名を聞くことを怖れます。私の父親が腎不全を告知された時の思いは何度も聞かされたものです。更に、生まれつきの病というものもあり、その人の生活習慣とか不摂生とは無縁のところで及んでくる苦悩があります。血液の癌、母子感染による HIV、先天性心疾患など、多くの難病との戦いがある。その子を見る親の苦しみはいかばかりでしょうか。癲癇（てんかん）というのは、その一つと言えるでしょう[1]。私が「癲癇」という病名を初めて聞いたのは大学に入ってからでしたが、当初はどういう病気なのか知る由もありませんでした。その病気を持っていると、時々襲われる発作のゆえに、運転免許も取れないという話を聞きました。今日は癲癇の少年の癒しの記事から御言葉に聞いてまいります。

[1] 癲癇には先天性のものと後天性のものがあると聞きます。

【本論】

本論１．シナイ山麓的状況

彼らが群衆のところに来たとき、ひとりの人がイエスのそば近くに来て、御前にひざまずいて言った。（17:14）

主イエスと三人の弟子たちは、「山上の変貌」の出来事を経て、山から降りてきました。この状況はよく、モーセが 40 日間シナイ山に留まり、律法（二枚の石板）を授かって下山した状況と比較されます（出 32 章）。この時、イスラエルの民はモーセがいつまで経っても戻って来ないのに痺れを切らし、アロンを抱き込んで鋳物の子牛を作り、それを拝んでいたのです。指導者不在の間に瞬く間に堕落した民の惨状が描かれた一幕であります。今日の箇所におきましても、主イエス不在の間に弟子たち（十二弟子はイスラエル十二部族の縮図）が信仰を保ってしっかりと働いていたかというと、それとは程遠い姿が露呈されます。

ここで「**ひとりの人**」が来たと言われていますが、日本語では男性か女性か区別がつきません。原文では男性形の主語が使われていて（ἄνθρωπος）、「彼」が何らかの目的を持って主イエスの許に来たことが分かります。今日の箇所はマルコにもルカにも並行記事がありますが、マタイは他二人の福音書記者の記し方に較べてずっと内容を簡略化しています。マルコによると、それが一人の父親であったことが分かる。

すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。」（マルコ 9:17）

ここで主の許にやって来た人が（母親ではなく）「父親」であったという点に私は注目しました。スロ・フェニキヤの女も似た状況に悩み、主の許を訪ねましたが（15:21-28）、多くの場合子どもと関わる時間を多く持っているのは母親であります。しかし、ここでは父親がやってきて、子どもの状況を訴えるのです。

「主よ。私の息子をあわれんでください。てんかんで、たいへん苦しんでおります。何度も何度も火の中に落ちたり、水の中に落ちたりいたします。」（17:15）

本論２．癲癇について

ここで「癲癇」という病名が登場しますが、原文では「σεληνιάζομαι」という言葉が使われていまして、古い英語の訳では「月に打たれた」とか「気違いじみた」という意味の“lunatic”という言葉が当てられていました。最近では「癲癇」を意味する

“epileptic”が使用されている訳が多いです。18節によると、これはただの癲癇ではなく、どうも悪霊が関わっていたようでして、病気と霊的な問題が同居し、ミックスされたような症状であったことが分かります。これは非常に厄介な事例です。病気の方(ほう)に焦点を当てますと、癲癇というのは「脳細胞に起きる異常な神経活動（てんかん放電）のためてんかん発作をきたす神経疾患あるいは症状」[2]と説明されます。脳内に突然の嵐が来て、脳細胞が一斉に興奮する。その嵐は通常数分以内で治まるが、また繰り返しやって来る。癲癇の前兆から発作への変容時に叫び声が出て、痙攣と意識喪失の中に自己知覚が崩壊する。[3]

主イエスを訪ねた父親は、医学が進んでいない時代、どれほどの苦悩を味わってきた

---

[2] Wikipedia

[3] Fred Vogelsteinという作家による『てんかんと大麻』(Marijuana of Hope）という作品では、４歳半から１日に100回もの発作を起こしていたサムという少年に、７年に及ぶ20もの治療を試みてきた親が、万策尽きて大麻という特効薬に進んでいく実話が扱われています。アメリカでは違法になるので、イギリスでその治療を受けられるように図る。当時まだ実験中の治療であったため、サムは言わばモルモットのように実験台になっていくのです。

「健康な子どもをもつ親には、わたしたちが取った行動はとても想像できないだろう。マイホームでもマイカーでも大学の授業料でもなく、治療に何万ドルもの大金を支払うなんて。そして、それがどんな治療であれ、それを初めて受ける子どもとして我が子を差し出すなんて。

しかし、サムは健康な子どもではなく、４歳半からてんかんを患っている。ありとあらゆる治療を試した。静注免疫グロブリンを使った自己免疫治療や高脂肪食療法も試した。それらはほとんど効果がなかったし、ある程度の結果が出たとしても、長続きしないか厄介な副作用があるかのどちらかだった。

サムの病気は、てんかんと聞いて多くの人が連想するようなものではない。地面に倒れてピクピクとけいれんするような大きな発作を起こすタイプではなく、5～20秒間、部分的に意識を失う「欠神てんかん」と呼ばれる、治療が難しいタイプのてんかんだ。放っておけば、１時間に10～20回もの発作が起こる。つまり、3～6分に1回のペースだ。発作は時として、１日100回を超えることもある。

わたしから見れば、発作を起こしたサムは、まるで一時停止しながら再生される映画のようだ。とつぜん動きが止まり、宙を見つめる。上半身がわずかに前傾し、リズミカルに揺れる。それが終わると、何ごともなかったかのように活動を再開するのだ。発作前、彼が歩いていたならば、（発作後）再び歩き始める。学校の準備をしていたなら、それを再開する。サムに言わせると、彼自身も発作に気づくことがあるという。ただ多くの場合、それに気づくのは、周囲のすべてが少しずつ変わっているのを知ったときだそうだ。会話もままならないし、学校での勉強となればなおさらだ。スポーツなどはもってのほかで、まだ小さな子どもだというのに、中断することなしには泣けさえしない。膝をすりむいて15秒間泣いたと思ったら、15秒間発作を起こしたあとで再び泣くといった具合だ。以前、DVDで映画を観たときには、盤面が傷だらけだったと文句を言ったことがあるが、実際にはそうではなかった。彼があまりにも多くの発作を起こしたため、途切れているとみえていただけだったのだ。」

(https://wired.jp/special/2017/marijuana-of-hope/)

少年サムは、驚くべき大麻治療の効果で、劇的に症状が改善されていきます。治療を始めた日は68回／日だったのが、ほぼ一週間で一桁に減り、薬の副作用もなく、症状が出ても数秒で終わるようになりました。

ことでしょうか。彼はありとあらゆる治療を試し、財産を使い果たしてきたのかも知れません。医者に治せないのであれば、宗教家の許へ行ったことでしょう。異教の祈祷師のところへ行ったこともあったかも知れません。悪霊はそこでもらってしまったか。ユダヤ宗教の権威者である律法学者も祭司も無力でした。そして、彼はナザレのイエスの噂を聞いてやって来たのです。最後の頼みの綱として。ところが、主イエスは不在、弟子たちだけが山麓に残っていました。父親はやむなく弟子たちに癒しを求めましたが、彼らにはできませんでした。

本論３．主イエスの激怒

そこで、その子をお弟子たちのところに連れて来たのですが、直すことができませんでした。（17:16）

当時、病気は悪霊や罪に起因すると単純に捉えられる傾向があり、それが病人を一層苦しめていました。しかし、今回はまさしく悪霊が関わっており、父親は主イエスの弟子たちに追い出しを願ったのです。ところが、彼らにはそれができなかった。

イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといっしょにいなければならないのでしょう。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょう。その子をわたしのところに連れて来なさい。」そして、イエスがその子をおしかりになると、悪霊は彼から出て行き、その子はその時から直った。（17:17-18）

主イエスはこの状況に激怒される。主の怒りが向けられているのは、９人の弟子たちの無力にだけではありません。「**不信仰な、曲がった今の世**」に対する怒りです。「不信仰な」とは、神に対する態度が根本的に誤っていることで、この時には多くの群衆が集まっていたようですが（マルコ 9:14)、その中の誰も癒しを行なうことができない。つまり神の御心に適う者がいなかったということです。「曲がった」とは、手のつけようのない倒錯に陥っている状態で、どうもこの状況（癲癇に苦しむ親子）をそっちのけに、律法学者は癒しを行なえなかったイエスの弟子たちに議論を吹っかけていたようであります（マルコ 9:14)。信仰の欠如、希望の欠如、そして愛の欠如であります。

主イエスが怒りを露わにされる記事は決して多くはないのですが、それらは共通して「不信仰」と関わっていることが分かる。その代表的な箇所として、「宮清め」の場面が思い浮かべられるでしょう。神殿が商売の場となり、犠牲の動物が其処彼処で売られている。本来、神のために苦労をして犠牲の動物を連れてくるはずが、金さえ払えばそれが手に入り、まるで金銭で罪が償えるかのような形骸化した宗教を目の当たりにし、主は憤られたと思われます。主の怒りは常に人の不信仰と関わっている。

ここでも、主はシナイ山麓の偶像礼拝に似たイスラエルの惨状を見て取られたのでしょう。そして、主はただ一人神の御心に適うお方として、その子を癒されました。これもまた、モーセが再び山に登り、民をとりなした姿と似ています。

本論４．からし種ほどの信仰も

> **そのとき、弟子たちはそっとイエスのもとに来て、言った。「なぜ、私たちには悪霊を追い出せなかったのですか。」イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、『ここからあそこに移れ』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。**（17:19-20）

癒しを行なうことのできなかった弟子たちは、その悔しさで一杯だったはずです。なぜなら、彼らは過去に悪霊を追い出す権威をいただき、主の御業を行なっていたからです（10:1,8）。彼らはなぜ今回悪霊を追い出すことができなかったのか。主はここで「**あなたがたの信仰が薄いから**」だと言っておられますが、続く言葉によると、彼らには「**からし種ほどの信仰**」もなかったということになります。ゆえに、中には「信仰がないからだ」（高橋三郎）と訳している人もいます。本質的にはそういうことになるのでしょう。

ここで難しい問題に私たちは直面します。信仰というのは、一度持ったならば損なわれることがないというのが私たちの信条ではないか。「聖徒の堅忍」の教理は、一度主イエスに結びついた者は永遠に損なわれることがないという真理を教えています。しかし、ここでは弟子たちに「信仰がからし種ほどもない」という歴然たる状況がある。主の御業を行なえないことがそれを立証しているのです。

このことを理解する上で、私たちは士師記のサムソンという人物を思い起こすことができるでしょう。彼は生まれながらのナジル人として、決して髪の毛を切らないという誓約の下に生きていました。士師記は彼の怪力の源は髪の毛（に象徴される神との関係）にあったと語っています。ところが、彼は神との誓約を軽んじ、デリラに秘密を明かし、ペリシテ人によって髪の毛を剃られてしまいます。その結果、彼は力を失い、もはやかつてのような力を発揮することができなくなってしまいました（士師 13-16 章）。

この記事が表していることは、信仰者は神との正しい関係になければ無力になるということでしょう。もし私たちが聖書を読むこともなく、祈ることもなく、世の楽しみに耽ってばかりいたとしたら、霊的な戦いに勝利することはできません。21 節は括弧で括られていますが、これは古い写本にはこの節はなく、恐らく後になってマルコ 9:29

から引っ張られてきたものと考えられるからです。しかし、主が言っておられる「祈りと断食」というのは、信仰者が霊的な戦いに臨んでいくに当たって必要な要素であると思われます。断食は悔い改めの姿勢であり、それによって整えられた霊的状態で神と交わり、御心を知っていくのに有効です。私も大きな戦いに臨む時や、主の御心を求める時に、断食をすることがあります。無防備な状態で悪霊と戦うことは非常に危険です。場合によっては一週間の断食と祈りを経て、現実の問題に取り組む必要もあるでしょう。

【結論】

弟子たちの無力は、彼らの心の奢りにあったと思われます。かつて御業を行なうことができたのだから、今回も当然できると思ったのです。しかし、彼らの霊は十分整えられてはいませんでした。悪霊の支配する現実を打開することができませんでした。主イエス不在の間に霊的力を失っていたのです。このことは、私たち自身にも当てはまるのではありませんか。日曜日を終え、礼拝の場を離れると、瞬く間に世の誘惑に心が向いてしまう。主と共に歩むことを忘れてしまう私たちがいないでしょうか。日曜日は礼拝生活の基盤であり、残りの六日間を神と共に歩み、神と共に戦うための礎とする日です。そして、主の日がいつ来てもいいように、私たちは 24 時間聖霊に満たされながら歩むことを目指したいのです。私たちの生活を今一度根本的に見直そうではありませんか。

【祈り】

力ある主よ。栄光に輝くキリストと、山麓の無力な弟子たちとが対比されました。私たちはこの記事を笑って読むことができるでしょうか。私たち自身も、主の来臨の日に同じように無力である可能性があります。神との交わりが欠如したところに定めの日が来ることほど恐ろしいことはありません。どうぞ私たちの霊を目覚めさせてください。そして、聖霊に満たされて主の御業を行ない続けることができますように。たくさんの御霊の実を結び、霊的戦いに勝利を得ていくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
山麓の混沌の許に、救い主イエスを遣わし給うた、父なる神の愛。
癲癇に苦しむ親子を憐れんだ如く、我らの病をも憐れみ給う、主イエス・キリストの恵

み。
神との密接な交わりの中で、多くの御霊の実を結ばせ、あらゆる霊的戦いに勝利を得させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。